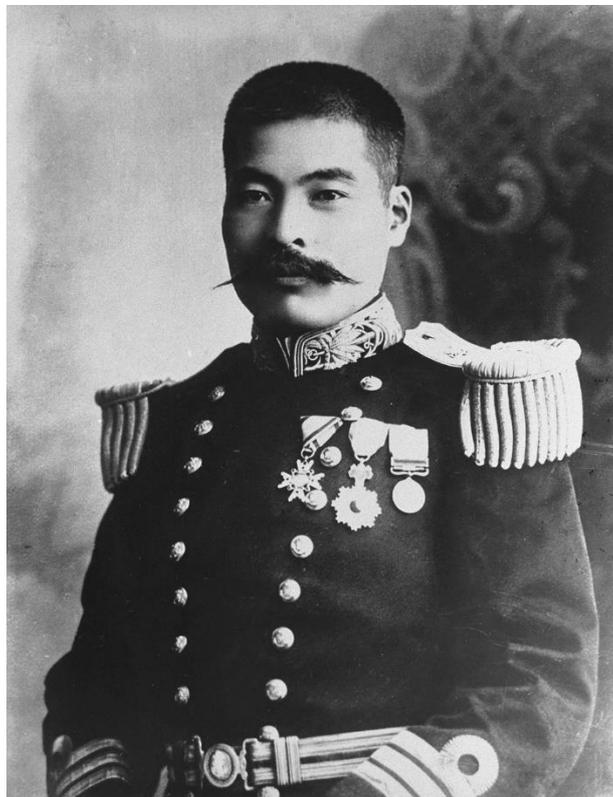


明治のサムライ 広瀬武夫

明治が終わってから約百年。日本史に否、世界史に燦然と輝く明治の時代は、今迄我々が学んだ如く、誇るべき無数の「サムライ」達によって支えられていた。しかし嘗ての日本人なら誰でも知っていた「サムライ」達は、現在は忘れ去られた人も多い。

しかし彼等の人物やその言動を知ることによって時代を越えて我々を魅了して止まぬ「何か」があり、現代の我々に大切な示唆を与え、感動を与え、勇気を与え、未来への指針を示すことに気付くだろう。この様な先人達の精神的叡知の絆を現代の日本人は決して断ち切ってはなるまい。歴史を学ぶとは、この様な意味があるのであろうか？ 南洲翁を選ぶのは、あまりにも大き過ぎて荷が重い。日本道である十七条の憲法とか、佐藤一斉の言志四録も学ぶ必要があろう。、、、がどうしても気になる人物が頭を去らない。それは民族を超えて敬愛された快男児、嘗て愚生が小学生の頃こんな男になれたらと思った人物、少しでも近づこうと思ひ高校で柔道部に入部する因となった人物、広瀬武夫その人である。



広瀬武夫

子供の頃「郷中（ごじゅう）」秀成学舎の仲間達と国民唱歌として明治・大正・昭和へと広く愛唱された「広瀬中佐の歌」を、己が広瀬になった気分になって歌ったものだった。今でも1番から3番迄歌える。

「とどろく砲音（つつおと）、飛びくる弾丸（だんがん）、
荒波洗うデッキの上に、闇を貫く中佐の叫び、
杉野はいずこ、杉野はいずや」

「船内くまなくたずぬる 三たび 呼べど答えず、
さがせど見えず、船は次第に、波間に沈み
敵弾いよいよあたりに繁し」

「今ほと、ボートに移れる中佐、とびくる弾丸（たま）に
たちまち失（う）せて、旅順港外、うらみぞ深き
軍神広瀬と その名のこれど」

廣瀬中佐

♩=112

ト ド ロ ク ツ ツ オ ト ト ビ ク ル ダ ン ヅワン
 セ ン な い く ま オ 納 た づ ぬ る み た び
 イ マ ハ ト ボ ー ト ニ ウ ツ レ ル チュ ウ、サ

ア ラ ナ ミ ア ー フ フ デ ツ キ ノ ウ ヘ ニ
 よ ー ベ ク ル タ ー マ サ ヌ タ が マ セ ど み え サ
 ト ビ ク ル タ ー マ サ ヌ タ が マ セ マ チ ウ セ ナ

ヤ ー ん ね は し だ め い ク チ ユ ウ サ ノ サ ケ ビ
 フ ー ね は し だ め い ク チ ユ ウ サ ノ サ ケ ビ
 ヲ 田 ジュン カ ウ グワ イ ウ マ ミ マ ズ フ カ キ

ス て ギ キ ノ ハ イ ズ コ ー ス ギ ノ リ ハ キ ズ ヤ
 ン シ ン ヒ ロ セ ト ヲ ヲ ン ノ ナ ノ コ レ ド

広瀬武夫も終戦後、忘れ去られた偉人の一人でもある。広瀬は軍人として立派であると同時に、人間として実に魅力にあふれた好男子であった。

広瀬は日露戦争では旅順口閉塞作戦に従事し壮絶な戦死を遂げた。三十五年の短い人生ではあったが、その人と為りは彼を知る多くの人々に敬愛され慕われた。それは民族・人種の壁さえ超えるものがあつたと評されている。そうであろう、彼の短い生涯をたどり見る時、しみじみその人物の純真さ・清らかさ・邪心のなさを愚生は感じるのである。

広瀬は明治元年五月二十七日、大分県竹田（たけた）に、勤皇の志士として活躍し尽力した岡藩士、広瀬重武の次男として生を受け、武士の子としての厳格な教育を受け、この父より尊皇愛国の精神を授けられたのであつた。

広瀬は少年時代より心の優しい同情心の極めて深い人間だつた。小さい時はとても涙もろく、大声で叱られるとすぐ涙ぐむ泣き癖があつた。しかし体は並以上に大きく丈夫で力強く相撲などでも誰にも負けなかつた。この様に穏やかでおとなしい性格ではあつたが、一旦決意すれば、梃でも動かぬ芯の強さ、どこ迄もやり通す意志の強さが目立っていた、、、と伝わっている。



竹田市の歴史記念館前の広瀬武夫像

<世界一の人物たらん>

明治12年、兄勝比古が海軍兵学校に合格したのに刺激され海軍を志した。明治16年海軍兵学校志望者の為の学校「攻玉社」で学ぶ為に上京し、岡藩出身の政府役人で、父重武と共に尽くした勤皇の志士であった山県（やまがた）小太郎の家に寄宿し、猛勉強を始めた。山県は広瀬に日本人としての根本の精神や「覚悟」につき教え導いた広瀬武夫の生涯の恩師であった。この頃、体力に優れ武道を好む広瀬は、嘉納治五郎の主宰する講道館に入門、勉強のかたわら柔道に精を出した。2年間攻玉社で学んだ広瀬は明治18年、17歳の時見事海軍兵学校に入学した。入学直後、今後海軍軍人として世に立つ決意を父へ便りし、次の如く披瀝している。

「不肖頑児（広瀬のこと）ようやく海軍に入ることを得候ところ、御祖母公、厳大人（げんたいじん＝父のこと）の御歡喜一方ならず候由、尊翰（そんかん＝父の手紙）にて領承仕り候。ことさら御祖母公、大歡喜なされ候由、不肖頑児において大満悦の事に御座候。幼齡より御覆育の御深恩を蒙（こおむ）り、いまだ御膝下（ごしつか）において朝夕奉侍（ほうじ）するあたわず。唯身を立て、名を揚げて御恩に報ぜんと存じ候をところ、今回の義につき御歡喜の由、真に不肖頑児において何の満悦か、これ加えんや。かつ孝妣（こうひ＝母）泉下の魂を慰むるに足らんかと存じ候。その上正直を本（もと）とし日本第一等にの人物になれよ、との御奨励、感銘仕り候。豈（あに）唯、日本第一等を期せんや、五大洲（全世界）第一等の人物たらんと期し候心組にて、孜々（しし＝心から）勉強以って家声を揚げんと存じ候。はなはだ大言の義に候えども、毛利典厩（てんきゅう）＝（元就のこと）の如く、かく遠大の目的もようやく日本第一等たるのみならんと考えられ候、、、、」

明治の心ある父親が愛する我が子が一人前の青年、大人として人生の門出に立つときに花向けの言葉の見本が「正直を本とし、日本第一等の人物になれ」、..、である。これに対する広瀬の答え「豈唯日本第一等を期せんや、五大洲第一等の人物たらん」と答える。愚生は思うに、この天を衝く、青年としての意気が今の青年に欲しいものだ。将来への希望に胸躍らせる十代の青年時代、何よりも大切なのは単なる才能ではなく、こうした心意気・熱烈な志ではなかろうか！！ 国家の危機とは経済のみではない。精神の衰弱こそ最大の国家の危機なのであると我々は心すべきであろう。現代の17歳の青年が広瀬のような志高き手紙を親に披瀝できるだろうか？ 明治の青年達の心意気の高さ、知能の高さには驚かざるを得まい。

<明治天皇と広瀬>

兵学校時代の広瀬は骨膜炎で入院し、成績は振るわず下の方だった。しかし運動は随一で、人柄は申し分なく明朗快活、正直で優しく、親切、素直で剛胆、毅然として男らしい人物であったから級友の誰からも親愛された。卒業後の明治27年、明治天皇が横須賀に行幸された時、出迎に命ぜられた広瀬の左手に偶然明治天皇の御手が触れる光栄に浴した。広瀬は父への便りで次の様に述べている。

「海軍軍人の感激この上なく、大いに士気を鼓舞いたしました。頑児武夫は棧橋お出迎員を命ぜられ、実に天顔最も近くありましたところ、偶然にも聖上（天皇）の御手は、私の左の手にお触れなさいました。その際は勿体（もったい）なし、恐れ多し、有難しの念むらむらと起こり、感激のあまりほとんど人心地を致しませんでした。かかる勿体なきことは恐らく一生一代にして我家においても広瀬の姓を名乗って以来、私をもって始めてのことと存じます。このみぎり手にせし手袋は、一たび玉体に触れ奉りし品でありますので、我が物ながら勿体なく大切に納めおきます」、..、こうして広瀬は戦死をとげる時迄、この手袋を肌身離さず携えたのである。

広瀬は日清戦争では清国艦隊を打ち破った黄海海戦には出られず髀肉の嘆を困った。その代り、兄の勝比古が東郷平八郎の艦長をつとめる軍艦浪速（なにわ）の砲術長として大いに活躍した。広瀬はその後軍艦扶桑（ふそう）に移り、その年の旅順口攻撃、威海衛（いかいえい）攻撃に参加するが、清国海軍は黄海海軍での大敗後、まともな抗戦をせず降服したので広瀬は華々しい海戦の機会には恵まれず、兄を羨ましいがった。

注) 黄海海戦

1894年（明治27年）9月17日に日本海軍連合艦隊と清国海軍北洋水師（北洋艦隊）の間で行われた海戦。近代的な甲鉄蒸気艦が多数投入された世界史上初の海戦となった。この海戦の結果、清国海軍は大幅に戦力を低下させ黄海と渤海の制海権を失う事になった。

<柔道の修行>

広瀬の軍人生活中、柔道は切り離すことはできない。海軍兵学校が江田島でなく築地（つきじ）にあった頃、攻玉社での勉学と共に熱心に講道館に通っ

た。広瀬は体も大きく素質もあったので在学中の20歳の時、初段を許された。当時の講道館初段といえは今の初段とは比べものにならぬ実力と価値があり、黒帯をしめることは一流の実力の証明であった。二段ともなれば柔道の師匠として道場を開き飯が食えた程、一流中の一流の腕前とされた時代である。

海軍将校となって間もない明治23年秋、講道館で紅白大試合が行われた。これは勝ち抜き戦だが、この時紅組の広瀬は白組の初段5人を破り、6人目の二段と引分けにする、講道館始まって以来という大活躍をし、館長嘉納治五郎より二段を授けられた。この時の喜びを、郷里で病床に臥していた父に次のように伝えている。

「私が柔道稽古の熱心なことはおそらくは同門諸氏の中にも、ほとんど稀であると、人も許し自らも許すほどですが、まゝならぬ軍艦生活、余暇をぬすみつつわずかに積み重ねた稽古のこととて未熟千万まことに面（おも）恥ずかしい心地が致します。しかしながら勝負を願う心は浅からぬものがあり、いつの日か勝負を争って我が手並みを示さんと思って参りましたが、いまだにその機会が一度もありませんでした私は紅組となりました。私の稽古の数は少なきも体格強大にして、いささか天狗然たるいい方ですが、試合には必ず勇を奪って活躍する紅組中屈指の勇将と見られておりました」、……、中略

—次に続く—

平成29年2月26日

志雲会塾長 有馬正能